



宮城教育大学 学長 見上 一幸

皆さま、こんにちは。ご来賓の方々、そして世界中からお集まりの友人の皆さま、ご出席の生徒の皆さん、そしてご出席の皆さま方、私は宮城教育大学の学長、見上一幸と申します。主催者を代表いたしまして、この度、皆さまに今日の午後のプログラムの目的と概要についてご紹介できることをとてもうれしく思います。前半は英語で、あとで日本語に切り替えたいと思います。

まず、この度の大震災で亡くなった2万人以上の方々の慰霊を込めて、4年前、東北地方における地震や津波の被災者の方々に思いをはせたいと思います。私の友人の多く、学内の人たちも含めてこの災害で多くの被害にあいました。家族の一員を亡くした人たちもいれば、経済的に困難な状況に直面した人もいました。例えば失業、住宅の損傷、原子力発電所の避難区域からの避難による問題であります。

教育という観点から言えば、地元の学校はこの災害において多くの人たちの生命を救いました。620以上の学校の施設が、避難所として使われました。

しかしながら、一方で今回の地震と津波によって亡くなった子どもたちの悲劇的な状況も知っております。子どもたちの学習環境も大きく悪化し、学生、生徒たちはそのような状況に対応せざるを得ませんでした。東北唯一の教育大学として宮城教育大学は東北大学などと協力して、被災地の復旧に貢献すべく努力を続けてまいりました。災害直後、半分以上の学生が何らかのボランティア活動に参加しました。がれきの撤去から避難所の運営に至る活動に参加しました。こうしたボランティアの中で約4分の1が、学校の運営に関わる支援を行いました。私たちは災害教育復旧支援センターを、本学学内に2011年6月に設置しました。そして、日本中の教育大学と協力をして、宮城教育大学は約5000名の学生ボランティアを被災地に派遣する調整活動を行いました。中には全国各地から、教職プログラムの中から参加してきた学生たちもおりました。子どもたちにはプラスの影響が及んだと考えています。この災害においては、教育大学における災害復旧という面での重要な新しい役割が生まれました。本学は、今年50周年を記念します。それでは、ここからは日本語でお話をしたいと思います。

本フォーラムでは持続可能な開発のための教育を通じて、防災・減災の展開をテーマに実践発表やパネルディスカッションを行います。先ほど山脇国際統括官からもお話がございましたが、このESD、持続可能な開発のための教育は、人類共通の諸問題や地球規模の課題解決のために教育を通じて考えようと、世界中で取り組まれているプログラムです。

宮城教育大学は文部科学省と共にESD推進拠点の事務局として、ユネスコスクールの推

進者として、ここ東北で過去 10 年以上にわたって ESD と環境教育の推進の一端を担ってまいりました。詳しくはお手元の資料の最後のページをご覧くださいと存じます。

東日本大震災によって私たちが気付かされたのは、地域におけるさまざまな主体、ステークホルダーと手を携え、世界の仲間たちとつながりを持ちながら地域や地球の未来を考えて行動する ESD が、災害対策や復興にも大きく貢献できるということです。

しかし、ESD の実践者にとっても、これから防災・減災に取り組もうという方々にとっても、ESD の考え方やこれまでの経験が、これからの防災・減災にどのように役立つのか、十分な論議がなされていないのが現状です。そこで、私ども主催者である文部科学省日本ユネスコ国内委員会、宮城教育大学では、第 3 回国連防災世界会議において防災や防災教育に関心のある方々が一堂に会する機会を捉えて、ESD と防災教育、防災の実践者や専門家を交えて新たな、貴重なシナジーをもたらしたいと願っております。

このあとの発表では、東日本大震災の被災地において教育復興やコミュニティ防災においてどのような取り組みがなされているか、そして、子どもたちや若者がどんな思いを持っているかを伝えていただきます。主催、共催者である東北大学、宮城教育大学の実践発表、そして、4 月から「災害科学科」というコースの新設を準備しておられます宮城県多賀城高等学校の発表、長年 ESD を通じた防災に取り組んでこられた気仙沼市階上地区の学校、地域の方々による実践報告と続いております。休憩をはさんだ第 2 部では、教育が防災、地域づくりなどの分野において世界の第一線で活躍する方々にご議論いただくことになっております。

ご登壇いただける方々のプロフィールにつきましては、お手元の資料にございますが、いかに優れた専門家、実践者にお集まりいただいたかがお分かりいただけると存じます。こうした皆さまと共に ESD の今後の展開、これからの防災教育について 14 日に採択された防災教育に関する「仙台宣言」や、海外の実践事例を踏まえまして、さまざまな観点から論議を深めてまいります。どうぞご期待ください。

さて皆さん、一度周りを見ていただけますでしょうか。お気付きのとおり、今日は多くの児童、生徒、大学生の皆さまにも参加していただいております。せっかくですので、この場で確かめてみたいと思います。小学生、中学生、高等学校の生徒さん、大学生の皆さんは手を挙げてくださいますでしょうか。(挙手) ありがとうございます。私たちの未来を担う子どもたちや若者たちがこんなにたくさん参加してくれることに感謝と期待を込めて、ここから厚かましいのですが拍手をお願いしたいと思います。(拍手) ありがとうございます。「よりよい子どもたちの未来に向けて」というサブタイトルにあるように、私たち大人が、子どもたちの明るい未来のためにどんな取り組みをすべきか、どういう社会を託せるのか、真剣に論議する姿を見てもらう絶好の機会になるかと思っております。

本学は今年創立 50 周年に当たりますが、戦後創設されたユネスコは 70 周年を迎えます。この地、仙台は 1947 年に世界で最初に民間ユネスコ運動の生まれた民間ユネスコ運動発祥の地でもございます。こうした節目の年に、東日本大震災の被災地でもある仙台で 10 年前

に策定された「兵庫行動枠組」の次なる世界防災行動政策が論議されております。このフォーラムが、防災・減災の展開に教育がどのように貢献できるかについて考える有意義な時間になるように願っております。

最後になりましたが、本フォーラムの実施に当たりまして多大なご協力をいただきました、共催先でもあります東北大学災害科学国際研究所、防災教育日本連絡会、ならびに仙台市国連防災世界会議実行委員会をはじめとする多くの団体、個人の皆さま、そして運営を支えてくださいましたボランティアの方々に心より感謝申し上げます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。Thank you very much for your attention。